

伏見城跡

発掘調査地元向け現地説明会資料

京都市文化財保護課
平成 27 年 6 月 13 日（土）

所在地：京都市伏見区桃山筑前台町 27-4 他
調査機関：京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
調査期間：平成 27 年 4 月 15 日～6 月 26 日（金）予定
調査面積：約 340 m²
調査要因：個人住宅新築工事に伴う発掘調査（文化庁国庫補助事業）

1. はじめに

伏見城は慶長 2 年（1597）に、木幡山を中心として豊臣秀吉により築城され、城下の西側を中心に武家屋敷や商工業者が集まる城下町が形成されました。しかし慶長 5 年（1600）の関ヶ原の合戦の前哨戦で主要な建物は焼失してしまいます。その翌年には徳川家康によって再建が始められ、慶長 8 年（1603）には征夷大將軍の宣下をこの城で受けています。元和元年（1615）の大阪夏の陣で豊臣氏が滅亡し、二条城が造営されたことにより、城郭としての役割を終え、元和 9 年



図 1 調査地位置図

（1623）の徳川家光の三代將軍宣下を最後に廃城となりました。

調査地は、JR 奈良線と大手筋の交差点よりやや北に位置し、伏見城下の大名屋敷が建ち並ぶ部分にあたります。伏見城下の大名配置を記した絵図は数多く残っており、『伏見御城郭並武家屋敷取之絵図』（桃山城所蔵）や『伏見御城絵図』（中井家所蔵）には、「肥前中納言」と記され、加賀百万石を築いた加賀前田家の屋敷地跡であると推定できる場所です（図 2）。屋敷地内ではこれまでに 4 例の調査が行われており、柵列や屋敷地内道路と考えられる石敷きなどが確認されていますが、遺構の残存状況は良いものでなく、屋敷地内の様相は明らかにはなっていません。また調査地の南東隣接地（推定平松八右衛門の屋敷跡）で行った立会調査の際には、前田屋敷跡との境で金箔瓦を含む多量の瓦と石垣の一部が確認されています。

これらのことから、推定前田屋敷地内の様相を把握することを主目的として、調査を行いました。

2. 調査の成果

今回の調査では、伏見城築城時の大規模な造成土と、伏見城期と考えられる建物跡や塀などの他、伏見城廃絶後の土坑を確認しました（図 3）。

伏見城築城時の造成土

調査区全面に厚さ 2.3m 以上の造成土を確認しました。調査区を南北方向に断ち割り、土層観察を行うと、造成土は北東から南西に向かって、約 45 度の傾斜で赤褐色粘質土や褐色

粘質土、黄褐色粘質土、拳大の川原石を含む砂礫を交互に積み、その後、この上面を赤褐色粘質土で覆い、その上に目の細かい砂や粘土を水平に積み重ねていました。斜めに積み上げていく中で、粘質土層の間に砂礫層を設けるのは、造成土中の水はけを良くしたり、土滑りを防ぐ効果があったと考えられ、また上面に砂や粘土を水平に積むことで、見た目を良くする効果があったと考えられます。

伏見城期の建物や堀

確認した遺構は、礎石立大型建物跡が1棟（建物1）、東西方向の堀跡が2列（堀1・2）、堀に伴う溝跡が1条（溝1）、東西方向の地盤改良跡（地業）です。これらはいずれも造成土を切り込んで成立していることから、造成後につくられたことがわかります。

建物1は東西2間以上、南北2間以上の礎石立大型建物で、計7箇所の礎石据付穴を伴っています。礎石据付穴の規模は直径1.7～1.8mの円形で、深さ2.3m以上です。中には径2～3cmの礫や拳大の礫を使った層と粘土や粘質土の層が交互に積まれ、上から押し固めたような痕跡も確認できました。このように部分的に異なる土を交互に積み上から押し固めて地盤を堅固にし、大きな礎石やこれに伴う建物の自重に耐えられるようにする土木工法を「壺掘地業」と呼びます。

堀1は、東西3間以上の礎石立堀で、計4か所の礎石据付穴を確認しました。礎石据付穴の規模は直径0.8～0.9mの円形で、深さ0.3mです。いずれも壺掘地業が行われていました。

堀2は東西10間以上の礎石立堀で、計10か所の礎石据付穴を確認しました。礎石据付穴の規模は直径0.8～1.0mの円形で、深さ0.5mと堀1とほぼ同じ規模で、同様に壺掘地業が行われていました。また堀2の1.8m南には、礫の入った幅0.4～0.6mの溝1が並行しています。礫の様子や柱間から堀2に伴う溝である可能性があります。また堀2及び溝1は、古絵図や現状の地形などから、屋敷地南端に位置しており、南を限る堀であると考えられます。

地業は、幅4m、深さ1.4m以上の溝状の遺構です。径2～3cmの礫や拳大の礫を使った層と粘土や粘質土の層が交互に積まれ、上面は粘土で覆われていました。これまで確認した壺掘地業と同じ工法を確認しています。

伏見城廃絶後の土坑

東西7m、南北5m以上の方形土坑です。伏見城期と考えている建物や堀の一部壊して掘り込まれています。この土坑からは、古伊万里や唐津焼の碗の他、備前の播鉢、花紋の軒丸瓦が出土しています。また出土した花紋の軒丸瓦は、いずれもやや小ぶりで、堀の屋根に葺かれたものと考えられます。また花紋部分には赤漆が施され、金箔片も認められるものもあります。

3. まとめ

今回の調査成果として、伏見城築城時の大規模造成の過程と屋敷地内の建物や堀などの配置の一部が明らかになったことと、礎石建大型建物の礎石据付穴は、これまで伏見城下で行われた大名屋敷跡の調査の中でも最大級の規模のものであることが挙げられます。

これまで伏見城下で行われた武家屋敷跡の調査では伊達屋敷跡などでも「壺掘地業」を伴う建物を確認しているものの、今回ほどの規模の壺掘地業を行った例はなく、豊臣秀吉、秀頼の築いた方広寺の南大門に近い規模です。

今回の調査で、伏見城の成立過程とともに、豊臣政権、徳川政権では要職に就いていた前田家の伏見屋敷内の様相を垣間見ることができたことは、今後、伏見城及び伏見城下を検討していく上で、重要な成果といえるでしょう。



図2 「伏見御城郭並武家屋敷取図」

該当部分 ※ は調査区の想定位置



写真1 礎石据付穴壺堀地業の様子(北東から)

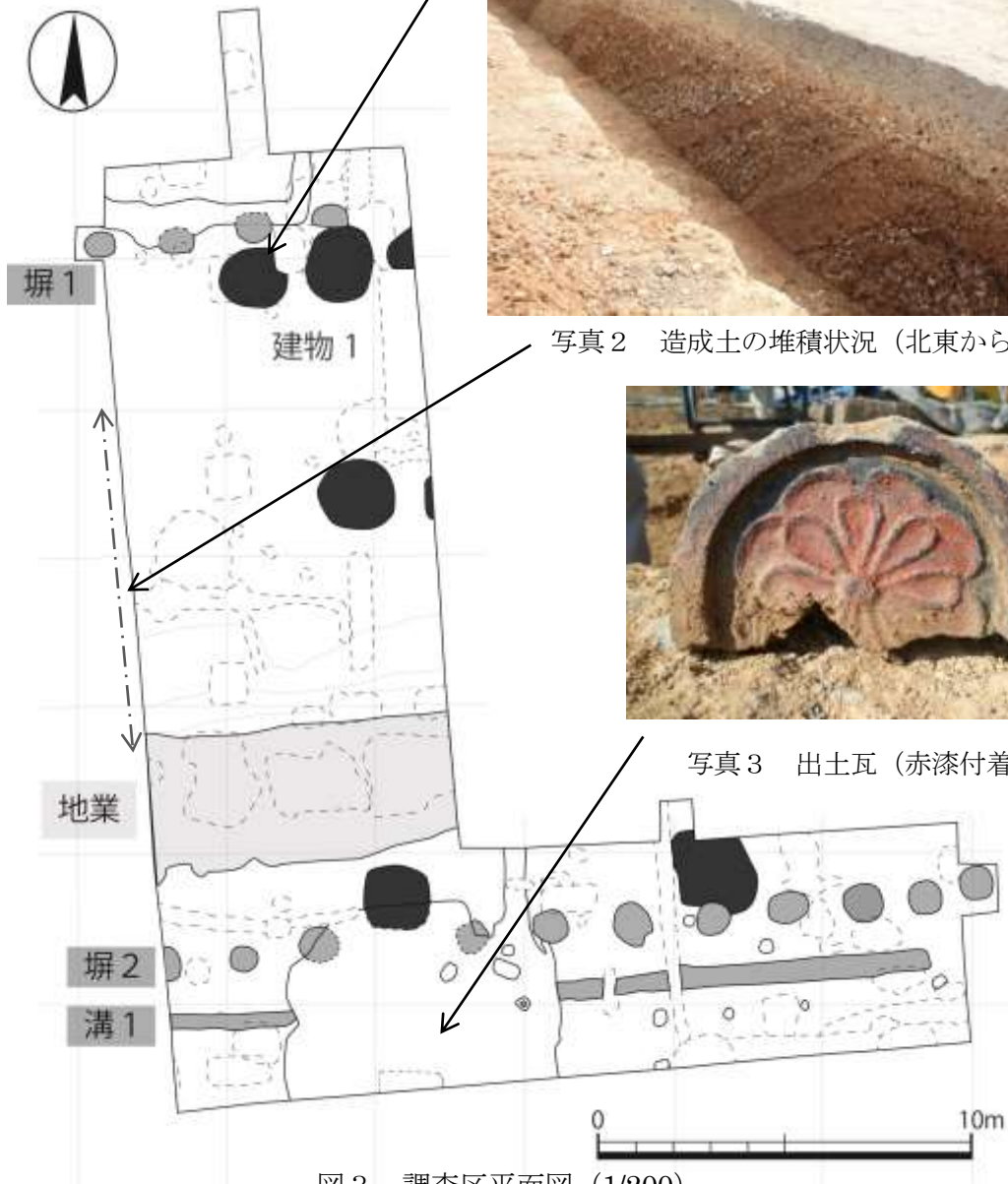


写真2 造成土の堆積状況(北東から)



写真3 出土瓦(赤漆付着)

図3 調査区平面図 (1/200)



写真4 北側調査区全景（北から）



写真5 南側調査区全景（西から）